

# 報告書

## 令和3年度(2021年度) 子どもの家庭養育推進官民協議会研修会 第1回

日時:2021年9月28日(火)午後2時~3時

開催方法:オンライン

内容:フォスタリングカードキット「**TOKETA(とけた)**」について

講師:田北雅裕氏(TOKETA 監修者/

九州大学専任講師、NPO 法人 SOS 子どもの村 JAPAN 理事)



**司会：内山忍（三重県子ども福祉部）**

本研修会は平成28年4月に発足した子どもの家庭養育推進官民協議会（以下「官民協」という。）で実施するものです。

今年度は昨年度と同様にオンラインで3日間に分けて開催いたします。子どもの権利擁護や里親の支援について、民間団体や行政機関それぞれの立場から何ができるか、一緒に考えて行ける場にしたいと思います。

第1回となる本日の研修会では、官民協が依頼した『フォスタリングカードキット TOKETA（とけた）』の企画及び制作者で九州大学専任講師の田北雅裕（たきた まさひろ）先生からご説明いただき、カードの活用方法を学んでまいります。

**田北雅裕**：私は現在、九州大学大学院人間環境学研究院でまちづくりやデザインを教えています。福岡ではNPO法人SOS子どもの村JAPAN理事や福岡市里親養育支援共働事業ファミリーシップふくおか代表も務めています。官民協ではフォスタリングマーク・プロジェクトのホームページデザインに関わらせていただきました。

児童福祉法が改正され、さまざまな啓発活動により、大人向けの情報発信や里親支援は徐々に広がりました。

一方で、子どもが里親制度や里親を知る機会はありません。こうしたなか、日本財団および官民協から、子ども向けのパンフレットデザインのご依頼を受け、準備を進めました。

制作にあたり当事者のお話をお聞きするうち、単なるパンフレットではなく、何らかの工夫が必要だと思い至り、一年以上かけて『フォスタリングカード TOKETA』を考案いたしました。

制作は、私と大阪のデザイン事務所、UMA design/farm（ユーエムエーデザインファーム）が共同で取り組みました。この度、いった

ん形になりましたので、まずは皆さんにお使いいただき、ご感想やご意見を伺い、ブラッシュアップをして2022年の春に普及を目指します。

緑色の箱に入った TOKETA。開けると一枚のメッセージが入っています。

この子が TOKETA です。



TOKETAは里子や実子、そしてこれから里親家庭で過ごす子どもたちのためのカードキットです。フォスタリングマーク・プロジェクトの一環として制作されました。

3つのカードワークを通して、子ども達が支援者や里親さんとの関係を深めること、里親家庭についてより理解できるようになること、そして子どもたちが感じている心配事や疑問を周りの人たちと一緒に考えて解決していくことを目指しています。

まずは支援の手引きをご一読いただき、TOKETAが大切にしているポイントを押さえた上で、子どもたちと一緒にサポートブックを開いていただきます。

フォスタリングカードという言葉は造語です。「里親家庭に迎えられる子どもが里親を理解できるように」というご依頼でしたが、当事者のお話を聞く中でいくつかの大事なポイントがあるなと気づいていきました。

## ■ TOKETAの箱に入った5つのツール



1) 支援者の手引き：支援者に最初に読んでいただくものです。

2) サポートブック：お子さんと支援者が一緒に見ながらお互い理解できるような構成になっています。子どもだけで読んでもカードの使い方がわかるように心がけました。

カードキットは3つ入っています。

3) こんにちはカード：子どもと打ち解けた関係になるためのカードです。しつもんカードを始める前のアイスブレイクにもなります。

4) しつもんカード：子どもたちが質問したい事柄を集めたカードです。

5) おうえんカード：心理士、ケースワーカーなどの支援者がたくさん描かれた小さなカードをちぎって並べ、エコマップを作成するようなツールです。

## ■ TOKETAが大切にしているポイント

TOKETAを制作するにあたって、大切にしたいことをお話いたします。

今回は私とUMA、そして里親家庭の実子である山本真知子さん、社会的養護の経験者でもあり、現在は里親支援者でもある中村みどりさんにアドバイザーになっていただきました。また、多くの当事者の方からお話をお聞きしました。

## フォスティングカードキット とは TOKETA が大切にしているポイント

- 里子だけでなく、実子も対象としている
- 大人が子どものために情報を伝えるのではなく、互いの関係と環境を育む
- 互いに応援できる関係を育む
- 正解がないことを受け入れられる関係を育む（わかりやすさとコントロールに慎重である関係）
- 直接子どもの声を聴くというより、子どもが声を出せる安心できる環境をつくる
- 子どもが大人にあわせるのではなく、大人が子どもになる
- 困り事を外在化することで、互いに向き合える構造にする
- 支援者が自分の言葉を大切にできる

ご依頼いただいた時点では「里子向け」でしたが、実際の里親家庭には里子も実子もいて、同じように困りごとを抱えていました。むしろ里子のケアに重きを置かれて、実子のケアが行き届いていないこともわかってきたことから、**里子だけでなく実子も対象**にしました。

大事なのは、**大人が子どものために情報を伝えるのではなく、互いの関係と環境を育む**こと。もちろん情報も伝えますが、そもそもケースワーカーとの信頼関係ができていない場合、そうした関係性に目を向けず、教科書的なパンフレットで情報を伝えようとしても伝わりません。安心できる環境を作っていくことにフォーカスして、**お互いを応援できるポジティブな関係性を育む**ことを目指しました。

**正解がないことを受け入れられる関係**、というとわかりにくいかもしれませんが。デザインの仕事では、わかりやすさが求められることが多いのですが、分かりやすいということは、コントロールしやすいことでもあります。それは支援者が少し前のために「子どもたちにこんな風に思ってもらいたい」と、子どもの見方をコントロールすることにつながってしまう。わかりやすさとコントロールについては、デザインを作る者として慎重になりたいと考えています。

一人ひとりの子どもが、それぞれの物語を持っています。それに対して支援者側から良し悪しをジャッジするのではなく、**関係性を育て**いけたらと思います。

今回はキットの使い手に「アドボケート」も想定しています。子どもの声を聞くことの大切さは児童福祉法の改正以降、重視されています。子どもの声を直接聞くことも大事ですが、**子どもの声が自然と出てくるような、安心できる環境づくり**がより大切。そのためのツールをつくろうと話し合いを重ねました。

子どもが大人に合わせるのではなく**大人が子どもになる**。これは当事者にヒアリングした際、想像以上に大人に気を遣っており、素直な言葉が出にくい状況がありました。また、大人側が「子どもたちのためにこうしなくてはいけない」というような気持ちが、お互いの対話を拒んでいるような状況も感じられました。

ですから、ゲームのようなしくみを通して、大人も楽しく参加することで子どもたちも気楽に言葉が発せられる状況を作っていけたらと思います。

**困りごとを外在化する事で互いに向き合う構造にすると**。難しい表現ですが、「私が困っていることはこうですよ」と直接伝えるより、カードに書いてあることについてお互い向き合うことで、少し距離を置いて、これから解決する問題として共有する、ということがやり取りのなかで見出せたらと思います。

今回は一般的なパンフレットのように「里親家庭はこういうものですよ」「こういう時はこうしましょう」ということが書かれているわけではありません。支援者の方々が自分で考えていただくような構成になっています。

それは支援者がその子どもと向き合ったときに、自分が大切にしている思いを**自分の言葉で子どもに伝えていただきたい**からです。

## ■支援者の手引き

TOKETAは紙の箱に入っています。開けると、先ほどお話しした「支援者のみなさま

へ」という透明のメッセージカードが入っています。



まずは支援者の手引きを読んでいただきます。はじめにということでTOKETAの説明が入っています。どのようなときに使用したらよいか、というようなことも書いてあります。



イラストはかわいらしく、かといってかわいくしすぎないように工夫しています。低学年のお子さんでも面白く使っていただけるようにしていますが、低学年の場合は里親や支援者の補助が必要になるかと思います。

TOKETAには「関係が打ち解けた」という意味を込めています。

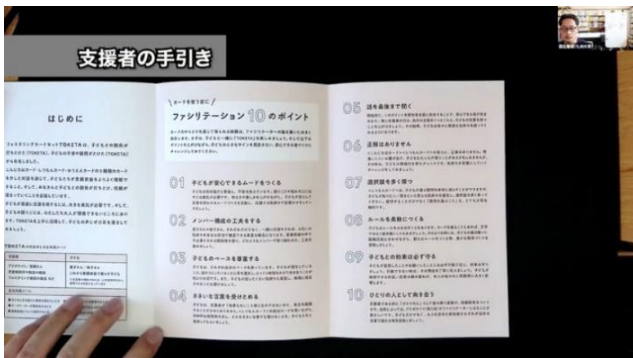
主な利用シーンとしては、関係を築きたいとき、子どもの困りごとを整理するとき、必要があって面談するときに使ってください。

**TOKETAの対象者と主な利用シーン**

支援者	子ども
アドボケイト/里親さん 児童相談所や施設の職員 フォスティング機関の職員 など	里子さん/実子さん これから里親家庭で暮らす子ども ※支援者の補助があれば、小学校低学年から使用できる内容になっています
<b>主な利用シーン</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 子どもと打ち解けた関係を築きたいとき</li> <li>● ケースワーカーが面談をするとき</li> <li>● 里親家庭について説明するとき</li> <li>● 子どもの困りごとを整理するとき</li> <li>● アドボケイトが子どもの声を聞くとき</li> <li>● 子どものこれからの生活を一緒に考えるとき</li> </ul>	

カードを使う前に「ファシリテーション 10のポイント」があります。

本に書かれている内容を子どもに説明をするのではなく、カードを使いながらコミュニケーションしていきます。支援者がソーシャルワーク、グループワークに慣れている場合は大丈夫かもしれませんが、慣れてない方は難しいと感じるかもしれませんので、大事にしたらいい10のポイントを書いています。



先ほどお話ししたポイントはTOKETAを作る際に私たちが考えていた大事なポイントです。一方、こちらはカードを使う時の工夫のポイントです。

まず子どもが安心できるムードをつくるのが大切です。メンバー構成の工夫をする。里さんとだけでなく実子さんも一緒にやってみるなどです。子どものペースを尊重する。子どものほうからなかなか言葉が出ないとき、焦らせるのではなく、子どものペースに合わせていく。

ささいな言葉を受け止める。今回は里子さん、元里子さん、実子さん、施設にいた方などにお話を聞いてこれを作り上げたのですが、例えば、「カーテンを開けることに驚いた」とか「夜にトイレの水を流していいのか」とか、里親さんからすると当たり前だと思っていることに疑問に感じて、それが自分の中で膨らんでいるような状況が少なからずわかってきました。

聞きたいけど聞けないというよりも、聞いていいのかどうかという迷いが結構あり、そういうことにアンテナを張ることが大切です。

話を最後まで聞く。子どもの言葉を待つように心がけます。想像しにくいお題が出てきても気持ちの表現にチャレンジしましょう。正解はありません。しつもんカードの数や種類は大人が調整できますが、なるべく選択肢を多く保つことが大切です。ルールは一応ありますが、柔軟に考えていきましょう。

質問されたことやお願いされたことなど、子どもとの約束は必ず守る。そのことで子どもとの信頼関係は築かれていくので必ず守っていきましょう。

あと一人の人として向き合います。

以上のポイントをお読みいただいて、臨んでいただきます。今回私たちがつくっていきときの大きな手がかりになったのは、アドバイザーの山本真知子先生の著書『里親家庭で生活するあなたへ—里子と実子のためのQ&A』です。ここには里子や実子が疑問に思ったことが分かりやすく、子どもたちの目線で、「こういう風に答えたらいいのではないかな」というようにまとめてあります。

支援者の方がこのTOKETAを使いながら「どういう風に答えたらいいのかな」と迷ったときには、この本を見て考えていただけたらと思います。TOKETAというカードの教科書的な位置づけで考えています。

## ■サポートブック

この手引きとは別に「サポートブック」があります。サポートブックは子どもがTOKETTAを使う時の手引きというイメージです。イラストレーターの方に絵を書いて頂いています。「今日は新しい家に行くんだよ」「あれが新しい家だよ。おかえり、ようこそ」というような感じです。



「里親家庭で住むことになったけどよく分からない、不安だなあ」とか。実子さんの言葉としては「里子さんが家に来ると言われたけどきょうだいができるということなのかなあ」などがあります。

いろいろな悩みが出てきたときにこのカードをみんなで使ってみようねということです。

目次があって、カードの使い方があります。

## ■こんにちはカード

まず安心して対話するためのルールを設定します。「カードを使う前にみんなの話を最後まで聞こうね、相手の話を否定しないようにしようね、思いっきり自由に考えようね」ということを確認して一緒に進めます。これによってポジティブなやり取りができるようになります。

こんにちはカードを使って「ことばすいじゃく」や「ことばばぬき」というゲームができます。神経衰弱やババ抜きに倣った遊びです。

こんにちはカードには「きもちカード」「ものことカード」があります。これを使って「ことばすいじゃく」をやってみます。

まず「ものことカード」を真ん中に置いてその周りに「きもちカード」を置いていきます。



じゃんけんをして「きもちカード」を開くと「ドキドキする」が出て、2枚目も出ました。真ん中の「ものことカード」を開くと「言葉」が出てきました。そしたら「ドキドキする言葉」って何だろうね？」考えていきます。子どもたちの発想でおもしろい答えが出てくることがあります。

大人自身も「これはどう答えようかな」と、大人が子どもになるような一面が出てきて、子それに対して子どもたちが共感していく。

そのことで子どもとの距離感が縮まり、関係性が育まれていきます。

こんにちはカードは、しつもんカードを使う前のアイスブレイクで使うことも想定していますが、気持ちと気持ちを溶かしていく、まさにTOKETTAの関係にしていくという工夫をしているカードです。

これはカウンセリングや面談などの機会だけでなく、日常的な遊びのカードとして子ども達に使ってもらっていいと思います。私も家で子どもと遊んでみました。意外な答えが出てきて、とても面白かったです。

## ■教えて！里子先輩

サポートブックに戻ります。ここで「教えて里子先輩」というページがあり、元里子さんの経験やエピソードを少し載せています。

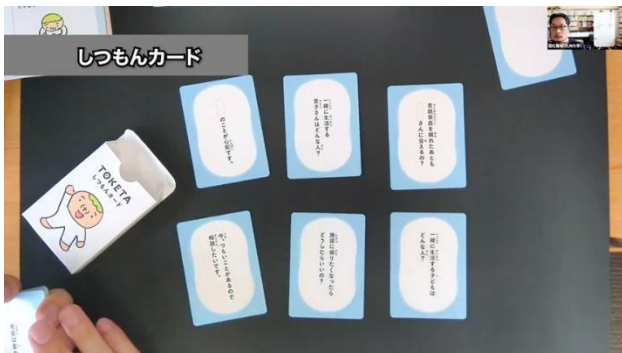
子どもたちがこれを読んで「こういうことを聞いてもいいんだな、感じていいんだな」と思えるように書いています。

先のページには、「教えて！実子先輩」というページもあります。ここでは「家が里親をしているという話をするとお父さんお母さん偉いねとほめられることが多い。でもその反応になんだかモヤモヤしていた」など、実際に実子さんから聞いた言葉を記しています。

“里子あるある、実子あるある”そういうコラムを載せています。

## ■しつもんカード

使い方はシンプルです。この箱にもルールブックが入っています。質問がたくさんここに書かれています。当事者の方々からヒアリングして「こういうことが聞けたら良いのではないか」ということをピックアップしています。



「施設に帰りたくなったらどうしたらいいの？」とか「一緒に生活する里子さんはどんな人？」とか「名前は変わるの？」など内容によって里子向け、実子向けに分かれているものもあります。

白紙のカードもあります。白紙のカードは自分で聞きたいことを記入できます。「何か聞きたいことはある？」と並べて、子どもと話をしていきます。何もない状態より選択肢がある方が聞きやすいからです。

いろいろなカードがありますが、支援者にとっては「これは聞いてほしくないな」と思うよ

うな内容もあるかもしれません。しかし、なるべく多くの選択肢を用意して子どもたちに聞いていただけるとよいと思います。これが最初のポイントで伝えた「たくさんの選択肢」ということです。

子ども達には選ぶ権利がありますし、コントロールを避けるという意味もあります。

例えば「この子にはこういう事しか聞いてほしくないな」と思って3枚のカードしか出さないこともあると思います。3枚しか出さない気持ちも色々あるかと思えます。「これしか確実に答えられない」とか「子どものためにこれくらいがいいだろう」など。その中で、このTOKETAを使いながら、自分の想定を超えて、子どもの立場に限りなく立っていただきたいと考えています。実際、このように試行錯誤すること自体が、支援者自身のトレーニングにもなると思います。

しつもんカードと関連した1枚の封筒があります。例えば、子どもが私と話をしているときに「このことは田北さんには話したくないな」と思うこともあると思います。里親家庭を離れた後も誰か他の人に聞いてほしいなというときに、この質問カードを封筒に入れて、ここに「〇〇さんへ」と書いて封をして渡す。



封筒はTOKETAをしている相手だけでなく、ほかの人にも聞けるという重要なアイテムです。秘密の封筒に入れて答えてほしい人に自分でこっそり渡すということもあるかもしれません。

この封筒に入れたカードを託された大人も、その子にとって信頼している人、ということになります。



しつもんカードを使って、みんなで話してみることもできます。例えば子どもたち同士で交流しながら「こういうことがあるけど君はどう思う？」ということにも使えると思います。

追加カードに自分の気になることを書いて質問してみる。嬉しかったことや気になることを自由に記録してください。

## ■おうえんカード

「おうえんカード」は点線でちぎれるようになっているカードです。それを並べたり貼り付けたりするシートがあります。



カードには、「わたし」や「役所の〇〇さん」「学校の〇〇さん」など、里子を取りまくさまざまな人のカードを用意しました。

そのカードをシートの上に並べてエコマップをつくっていきます。「わたし」を真ん中に置

いて「こんな人がいるね、あんな人がいるよね」と並べていきます。

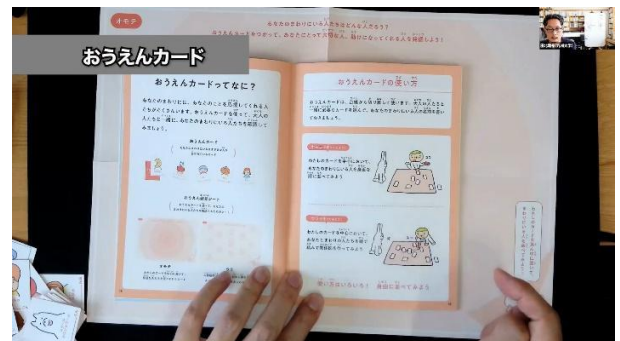
複数の人が支えてくれていることが視覚化できます。

エコマップができれば、写真に撮って、サポートブックに貼るスペースもあります。



おうえんカードはバラバラになるので、片付けて仕舞えるようにTOKETTAは箱入りにしています。

おうえんカードの使い方のところに、「はっけんシート」の記録もあります。





あなたの連絡帳は、大切な人、サポートしてくれる人の連絡先を書いてもらうスペースです。

最後のページは、「もしものときは」ということで、もっと情報を知りたいと感じた子どもたちが手がかりにしたり、SOSを言えたりする連絡先が書いてあります。



こちらは最後のページです。TOKETTAがなくても、言いたいことをちゃんと言えようになったストーリーを、漫画で表現しています。

最後は「つづ

く」となっていますが、TOKETTAがキャラクターとして育っていくとよいなと思っています。

このサポートブックは子どもが大事に持っていていただくものです。

連絡帳やエコマップをつくっておけば、里親家庭を巣立った後に「何かあればこの人達に連絡をしていけばいい」という安心になりますし、連絡先が増えていくことで、自分を応援してくれる人がこんなにいる、ということを実感していただく、そういうイメージで作りました。

一通りのご説明を終わります。みなさんのご意見を踏まえて改訂して、来年の春から本格的に広めていきたいと思えます。

## ■参加者との質疑応答

内山：田北先生ありがとうございます。

里親家庭のお子さん、一時保護のお子さん、いろいろなところでアドボケイトという言葉が使われています。子どもの声を聞くアドボケイト

トということに関して、私自身は非常に難しく感じておりました。

今回、TOKETTAについてお話をお聞きして、子どもの意見を大人も素直に、子供に素直に聞く、難しく考えていたことが、こうやって子供の意見をきちんと聞いていけばよいのだなと、アドボケイトについて敷居が低くなった印象がありました。それでは質疑応答に移ります。

**全国里親会：**わが家の小学校2年生の里子と大学生の実子と一緒にTOKETTAを利用しました。とても楽しく遊びました。こんにちはカードはカードゲームとしてとても面白かったです。お互い思ってもいなかったようなことが導き出されることがすごく楽しかったです。

サポートブックを大学生が読んだところ、「大人の押し付けみたいなところを少し感じるかな」とは申しておりました。

フォスタリング機関に配るときは、この全部のセットはすごくいいと思いました。里親家庭はもしかしたらこのカードの方だけでもいいかもしれません。

サポートブックに記入欄もありますが、里親さんの中には「ここを埋めなくて」と、子どもに無理に言わせてしまう節とかもあるかなと感じました。

あとサポートブックはおうえんカードとしつもんカードとこんにちはカードが、それぞれバラバラでもよいのかなと思いました。

いずれにしろ、すごく楽しくお互い知らない一面を知ることができました。

田北：ぜひ大学生のお子さんとお話をさせていただきたいです。なるべく押し付けにならないように気をつけましたが、使用するお子さんの年齢の幅を広げたことから、説明的にならざるを得なかった部分はあります。子ども達だけではなくて支援者も見るときに、説明があったほ

うがよいかと思いました。具体的にご指摘いただけたので、改めて見直していきたいと思いません。

また、里親さんに事前に使っていただいたとき、「発見したこと」など、メモしなくてはいけないとハードルが高くなるというご意見を頂きました。そこで、少し言葉のニュアンスを変えて、必ず書かなくてはならない、という負担を減らすように工夫しました。

これを研修キットとして使用すると「ちゃんとやらなくては」というモードになり、ハードルが上がるかもしれないので、特に研修時に参加者と共有したい課題だと思いました。ありがとうございます。

また、先ほど内山さんからアドボケイトの敷居が高いというお話がありましたが、そこは意識して制作しました。

アドバイザーの中村みどりさんから別の機会でごった言葉で「大人側、支援者側はドアのノックしかできない」という言葉が印象に残っています。ドアの向こう側に子どもたちが居る。そのドアノブを大人たちが引くのではなく、大人がノックしてあくまでもドアノブを握るのは子どもだ、というお話でした。

子どもの声を聞くこと、すなわち対人援助では「どのように子どもの声を聞くのか」というときに、ツールが必要という認識にはなりにくいですが、そこに、きっかけづくりができるツールがあれば、子ども達が自然とドアを開けてコミュニケーションをする流れになります。

TOKETTAでは「こんにちはカード」が特にそうした役割を担っています。カードを使う中で、自然と子ども達が自分から言葉を発するようになるということを目指しています。

アドボケイトは子どもの声を聞くということですが、子どもが声を出せる環境を作っていく、それこそがアドボケイトではないかと思えます。今回それをTOKETTAに込めました。

**内山：**田北先生、ありがとうございました。確かに子どもが声を出せる環境づくりには、カードゲームは非常に有効だと感じました。皆さま、ご意見やご質問はございますか？

**静岡市里親支援センター：**緊急事態宣言などで子ども達を集めることが難しかったのですが、今日の勉強させていただいた内容をぜひ今後実践してみたいなと思っています。

**田北：**支援者によっては結構ハードルが高いとおっしゃる方もいます。子どもと向き合う勇気がいるという方もいらっしゃるかもしれません。

**静岡市里親支援センター：**職員の中でまず遊びながら試してみて役割分担をしてみて、私たちが慣れてから、少人数から始めてみたいと思います。子どもの様子を見ながらやり方を改善していけたらよいかと思っています。皆さんの実施の様子も教えてください。

**キーアセット：**キットが届いたので拝見し、今回の研修会で勉強させて頂いてからやってみようと考えておりました。

まず「デザインが秀逸だなあ」というのが感想です。本日の研修会で私なりに使い方を理解したつもりです。

現場で子どもと関わっている里親さんからすると、真正面から「聞かせてよ」で聞かせてくれるのであれば、そもそも問題ないわけです。

このカードというツール、このカードで遊ぶという選択肢がマッチする子どもたちがいると思うので、そういう子どもに行き渡ることが重要だと感じました。

このカードをテーブルに広げる、そのテーブルに着いてもらえる関係性をどうやって作るかということも考えなくてはなりません。

テーブルに着いてもらったとき、トランプをするのか、UNOをするのか、TOKE TAをするのか。TOKE TAをするなかで見えてくるものはありますし、トランプやUNOをするなかで子どもの成長が見えてくることもあります。TOKE TAの中で子どもが発信できるものをしっかり理解することが大事だと思います。

子どもと大人でゲームをすることで、子ども側も一緒に生活する大人の人間性やその思いも理解できると思います。つまり相互理解というか、一緒に住んでいる家族のセルフディスクリージャー（自己開示）につながるものがとてもよいと思いました。

あと、「ゲーム」という表現ですが、「これは勝ち負けではないよ」ということを押しよくすることも大事ですね。ゲームというと勝敗があるイメージですが、その辺が子どもにどうやってわかってもらえるかなど。

また「里子」という用語を当事者がどう考えているのか、ということ少し懸念しているところではあります。

**田北：**デザインをほめていただきありがとうございます。デザイナーが尽力してくれました。UNOやトランプとTOKE TAとの違いは、UNOで遊んだらそれで終わると思いますが、TOKE TAなら「こんにちはカードを使ったら、次はしつもんカードね」と、ゆるやかにつなげて、質問をしていくきっかけになる流れもイメージしています。

**日本財団：**協力者やアドバイザーの方々からはどのような感想がございましたか？

**田北：**最初にガイドブックを作るという段階でお話をお聞きした方は、「これガイドブッ

ク？」とイメージとはまったく違うものができていたので驚かされていました。それはいい意味での驚きで、「いろんな人に紹介したい、使ってもらいたい」とおっしゃっていただいたのですが、まだ部数がなくて対応できていません。これから、必要な人にどう届けていくのかも含めて、考えていかななくてはいけないと思っています。

**日本財団：**TOKE TAは対一を想定しているのでしょうか、対複数でも可能でしょうか？

**田北：**どちらでもいいです。むしろそこをあまり考えすぎないで使っていただけたら。もちろんカードの枚数に限界がありますので、大人数では難しいですが、複数で使うことをイメージしています。

里子さんや実子さんが「お互いにこう思っているということが、もっと早くわかっていたら楽だった」というご意見も聞いていました。

児童相談所のケースワーカーは里子さんにはお話はするけれども実子さんには話をしない。みんな一緒に話をする中で、「こういうことを悩んでいたんだね」とわかることもあります。

まさに色々な人達が関係し合うきっかけとして複数の人たちが使うということを想定しています。対一の関係だと、わざわざこのゲームをすること自体にハードルが上がりそうですが、第三者的なアドボケイトが来て「ちょっとやってみようよ」ということになって、関係性がよくなっていくことをイメージしています。

**内山：**田北先生、ご参加の皆さま、本日はありがとうございます。本日の研修会はこれにて終了させていただきます。